

(基調講演)

マーヴィン・マクナマラ ミサイル防衛庁副長官

ご紹介ありがとうございます。今日こちらに参加できますことを光栄に思いますとともに、ご参加の皆様一人一人に感謝申し上げます。この会議は私にとって興味深いものであり、今までの講演者の方々が非常に見識に富んだ考え方を述べられました。私にとっても同様であり、私もそのような意見の反芻になろうかと思われま

す。今日のこの会議は、今回の日本滞在最後の2,3日のいわば結論のような物になるでしょう。これまで日本側関係者と、弾道ミサイルの共同開発に向けて様々な実りある有意義な会合を進めてまいりました。基本的には良い進捗状況であるということをご報告できると思います。ミサイル防衛庁はこれから得られうる様々な協力に関し嬉しく思っております。そういったわけで政治、軍、産業界の関係者の指導力、このようなことを可能とし、将来的にそれぞれの国にこの実りある弾道ミサイル防衛をもたらすことに尽力して下さった方々に対して感謝申し上げる次第であります。

今日みなさまにお話し申し上げたいと思っておりますことですが、現在我々がおかれている状況を見ながら、将来的な弾道ミサイル防衛能力の整備に関して、そしてまたどのようにして、この変わりゆく情勢に対処するのかということでもあります。実際我々は各々のリーダーシップに対し対応いたしますし、また同様に増大する脅威へも対応いたします。この脅威に関しては日々のスパンで必ずしも予測可能なものではなく、過去に我々を脅かしましたが、これは将来においても我々を脅かす物であるでしょう。私だけでミサイル防衛庁の功績をなせるわけではなく、私の右手の方にいらっしゃるフランクリン将軍は、私の前任者であり、敬意を持って彼こそこの流れの中で鍵を握っていた人物の一人であることをご紹介いたします。そういったわけで、このようなことに関して皆様方とお話したいと思うわけですが、フランクリン将軍の方からも我々の世界の捉え方といったような事に関し考察を述べていただけるかと思

います。こちらは、私の今日のお話しの構成要旨でございます。弾道ミサイル防衛構想についてどうい

うものなのかということについて少しお話しします。能力ベースのアプローチの実践に着手しており、この変わり行く環境、脅威に対処、適応するという意味で革新的なものであります。そして最後に、機能を最速で強化するために適切な技術に適切なタイミングで投資するための知見ベースの投資をどのようにしていくかについて述べていきたいと思

要があり、この点に関してはある程度緩和されたということになるわけです。また根本的に構想されていることとして、特定の建造物やミサイル防衛の能力だけでなく、実際には急速な展開に対する迅速な対応が可能な技術というようなものにも備えていくという体制がよいということでもあります。それに関しましては、今回大統領は、我々が着手すべき非常に重要な点を指摘したのであります。のみならず同盟国と共にいかに共同でやっていくかということが非常に大事なことであるわけで、それが私自身の今回の訪日の目的でもあり、これまでのところ非常に好感触を得ているといえます。

同様にラムズフェルド国防長官はミサイル防衛庁に対し特別委任を致しました。彼はもとも総合的な弾道ミサイル防衛の開発を指揮していました。これは一つの弾道ミサイル防衛のプログラムでありながら一連のミサイル防衛の要素が入っているものになるわけです。また長官は一度決定されたら5年後、10年後までかわらないという要求ベースの仕組みをやめ、革新されていく技術を導入し、脅威の環境もどんどん変わる中において、複雑になっていく要素にどうやって対処するかという仕組みへと変更いたしました。

我々が行ってきた活動などを考慮し、また実際我々が弾道ミサイル防衛構想の発案者であるので、根本的には、米国本土や展開された米軍、そしてまた友好国や同盟国に対しても防衛を提供できる必要があります。このためには短距離用から大陸間弾道弾まで、全ての射程の弾道ミサイルのシステムが必要となります。そして全ての飛行の段階において、多様な選択肢がとれなければなりません。そのため我々の取り組みとしては、能力ベースの研究開発に対応できる継続発展的な方策を構築すること、さらに柔軟で戦闘域における常に変化していく要求に対応することが重要です。

こちらは今日のミサイル防衛システムの構図でございます。今一度申し上げますと、このシステムは様々な能力の複合体となっております。一番上には、宇宙、陸上、海上とそれぞれに関連した技術が示されております。中央には、基本的には我々の発射統制機能が示されています。その中に迎撃機能が含まれておりますが、それは弾道ミサイルの全ての飛行の段階、ブースト、ミッドコース、ターミナルにおいて、又それに付随したすべての機能について対応する能力を持つことが予定されております。既に実用化されている機能や開発段階にあるもの、そしてまた将来の技術発展に託されているものもでございます。シュナイダー博士がおっしゃったことと同様に、ミサイル防衛においてもっとも重要であるのは、構造的な見地からいえば、これら多様な機能を根本的に統括する指揮統制・戦略管理機能であります。

長らく我々はシステムズ・オブ・システムに基づいた取り組みをどうにか発展させて参りましたがこれら全ての機能は指揮統制・戦略管理機能と強く結びついており、それによって基本的な状況の評価と構造的な対応機能の計画が行なわれるような仕組みが作られております。しかし、将来的にこれらの機能をまとめ、最適化するためには、真に統合化されたミサイル防衛機能を発展させなければなりません。キーとなるのは統合化でありまして、

それによって飛行の全ての段階において対応できる、そしてまたさまざまな複雑な脅威に対応することができるのであります。そして、これらのことは私が思うに、将来的に産業に可能性が期待される分野であるのです。そしてシステムズ・オブ・システムの取り組みから将来的に統合化された取り組みに移行する機会は広がっております。それは革新し続ける技術、つまりコミュニケーション機能や指揮統制機能、計画の立案機能、また計画を迅速にリアルタイムで更新できること、またミサイル防衛戦略の監理機能、というようなことを導入することですが、これらは非常に重要な飛躍的前進であり、将来的に大きな挑戦課題でもあり、さらにまた業界の各分野における革新的な提案に大きく期待しているところであります。

この継続発展的な開発の過程というのは実際の戦闘要員に能力をつけさせるということに関しての革新的な方法であります。過去の歴史を振り返って見ても、将来的にどのように国家やその他の非国家集団が自らの脅威を増大させるかということや、そのような脅威の複雑性がどういったものなのかを判断することは不可能であるからです。将来的に、我々が持ちうる機能を把握しておくために柔軟性をますことが重要です。そのために、われわれが持ちうる最初となる機能を発展させて、実際に戦闘要員に配備することを可能し、2004年後半から2005年で米国国土、友好国、同盟国、そして配備された軍隊に対する防衛能力を獲得するという大統領令に関して、多大なる成功を収めております。また最後に、既存の技術ベースの機能から、力を注ぐ方向に技術の適応を可能にさせることも重要であります。これは軍での実用性を示し将来的には我々の取り組みを統合いたします。これは我々が将来行う取り組みの変化になるでしょう。率直にもしあげますと、危険性をはらむ相手との共同開発も行っております。ここが、我々が即応可能であり柔軟でなければならない部分なのです。それはその手段と過程における新システムの開発が革新的であるという性格からであり、我々もそれは理解しております。

このような機能ベースのアプローチをとることによって展開される能力の鍵とはどのようなものでしょうか。適応力を増し、長期的にも短期的にも常に効果に関する理解を可能にさせます。初期段階の機能の早期配備を可能にし、継続的發展を可能とさせます。様々な機能の中でも、器具に関してはできるだけ早く戦闘要員に配備することが可能であります。それによって我々得は常に問題に対し関連を持ち、実際に全ての機能に通ずる糸としての適時的な機能を獲得し、またおそらく長期的、短期的に関わらず将来的にその技術の進歩で我々を驚かせることでしょう。最後に、これによりは我々が機能に関するシステムの開発の初期段階において、業界のパートナーに対しあまりに高い目標、もしくは達成し得ないような目標を設定しないこととなります。実際には段階的に要求を高めること時に要求を切り捨てることで何らかの機能の開発を可能とし、私はこれがあいまいではありますが一番の方法だと思っております。またこの様な知見によって DON の更新を可能にし、またプロセスに変化をもたらします。そしてキーとなる知見のある一点に関して、それが付加的な機能の開発につながる点であるという可能性にもとづいて発展させていくのです。その際に私どもの投資がどんなものであるかということの評価し、またその投資が堅持的に

行われているかどうかということを確認することが重要です。

このようなことが、ミサイル防衛に関して、知見ベースの投資アプローチを取るという一番の理由です。それによって我々が的を射た計画を実施しているという付加的な認識ができるのです。これは我々が既存の機能を再検討するというようなことではなく、その付加的な機能を得るべくして行うものです。もしこれが実際に可能であるならば、機能の技術的進展のための投資を加速させることができます。またもしそのような進展につながるものでないならば、その投資を減速させるということも考えうるわけです。ここで重要なことは、ミサイル防衛全般に関して我々が適応力に富むということ、またそれによって短期的、長期的にも、戦闘要員がより早くそのような機能を有効利用することができるということです。例えばケネディック・エネルギー迎撃システムの開発に際して、ある段階で我々が予定通りの開発プランに基づいているということを証明するために、確認されなければならない動作実施ポイントを設定いたします。この様に設定した動作ポイントに関してそれが成功か否かということに基づいて、研究を加速するのか、それとも減速させるのかということ判断する、そのために行う作業であるといえます。

こちらのスライドでミサイル防衛全般およびさまざまな開発段階の機能、さらにその過程で達成すべきポイントに関してご理解いただけるかと思えます。例えば、ブースト・フェースにおけるエア・ボーン・レーザーの開発に関して申し上げますと、これまでのところ非常に上手い具合に進展しているわけですがけれども、今後 2008 年内までに弾道ミサイルの撃ち落しの動作テストを完了させたいと考えております。このテストで好結果が得られれば、おそらく研究を促進するような財源の確保を行うことができるのです。2 機目の調達をするかという契約はそのテストの成果にかかっているということです。しかしその動作テストのガイドラインに期限の面、或いは能力の面でも沿わないということになりますと、財源の手当てが遅れ、その後の契約も遅れるということになります。そのほかのブースト・フェース及びミッドコースやターミナル・フェースにおきましても同様に達成すべきポイントを設定するという仕組みになっております。

まとめと致しましては、現在我々は従来行ってきたやり方を変えているところでございます。ですから純粋な意味では、国防総省が将来的に取る方法で無いかもしれませんが、ある程度適格な方向を示しているのではないかと考えております。実際、将来的にどのような機能が必要となるか、必要な機能を常に戦時に関わっているものたちに対して提供していくことができるように、適正なる調整を常にできるようにしておかなければならないわけです。同時に、それは脅威の認識がなされた時点では想定していなかった変化にも対応できるような安定性をもたらすのです。この方法によって、適切な機能を適切な時期に戦闘要員に配備することができると考えております。そして最後に、ミサイル防衛に関するこのような変化に富む投資のあり方は、戦闘要員に機能を提供するという点において非常に効果的であるといえるでしょう。

最後にもう一度、このような発言の機会を与えていただいたことに感謝申し上げたいと思います。我々が短期的にも長期的にも協動的にこれらの機能の発展に寄与することは本当に喜びでありますし、実際に私ども両国のミサイル防衛に関する取り組みが結実することを望みます。

ありがとうございました。